

## 「ともいき懇話会」報告③

世界のグローバル化、情報過多、価値観の多様化、少子高齢化、過疎化、そして宗教心の希薄化等々、世界や日本の変化の中で、人々は生きる指針に迷い、心の支えとなるものを求めています。

こうした現状に対して、「(公財) 浄土宗ともいき財団」では、平成 27 年春に「ともいき懇話会」を設立、宗教学者・作家・報道関係者など 8 名の有識者の方々から、今日の社会問題に対する宗教者の役割について意見・提言をお聞きしています。

### 第 4 回「ともいき懇話会」報告書

テーマ 「“看取り” —— どうしたら安心して死ねるか。そこに僧侶はどう関われるか」

日 時 平成 28 年 6 月 29 日 11 時～13 時

平成 28 年 6 月 29 日、「第 4 回 ともいき懇話会」が開催されました。

今回のテーマは、「“看取り” —— どうしたら安心して死ねるか。そこに僧侶はどうかかわれるか」。前回の「介護」に続く問題として、それに宗教者がどのように関わっていけるか、各氏からご意見をいただきました。

なお、発言者は A B C で表し、文中の Y 氏は宗教学者でともいき懇話会の代表です。

今回は、各氏から意見・提言の発表に先立ち、Y 氏から「今日の日本人の死」について講話をいただきました。

**Y 氏** 先日、麻生副総理が小樽で、90 歳位の方が老後の不安について話されたことに対して「お前さんまだ生きていくつもりかい」と、いかにも麻生さんらしい失言をした。本音のところを言ったわけだと思う。この本音がいま多くの人と言えないから目立つ。ところがこの発言を聞いた民進党の岡田代表が怒った発言をしていた。だから高齢者の政策をきちんとすべきだ、と。しかし、これは新聞のコラム欄に小さく載っただけだった。私はこれがどのように進展するかと楽しみにしていたが、メディアは突っ込まなかった。ほとんど話題にならなかった。

実は、私はこの数年来、医師に会うごとに「もうそろそろ、医学の世界で安楽死や延命治療等々の問題を正面から取り上げてみたらどうですか」と言い続けているが、医学界では一向に取り上げようとはしない。なぜかと言うと、この背景には国家財政・経済発展・高度医療が固く結びついていると思える。医学界が安楽死や延命治療の問題を取

り上げることは、ここに踏み込むことになる。これは非常に大きな問題になる。

私は医学界の人に、「これからの日本人というのは、“人事を尽くして天命を待つ”、この天命ということを経験界の人たちに考えてもらいたい。それから人間の寿命。人事を尽くすことには、医学的治療もあるが、そこには人権ということもある。もっと真正面から寿命・天命ということを考え、延命治療というものに対して根本的な考え方の転換をしていただきたい」と言っている。

そこまでは医学界の人にもよく分かってもらえるが、しかし、法的なかたちで医学界から話が出ることはない。特に安楽死については、タブー視しているようにさえ思える。ここが問題。改めて天命や寿命という日本人の基本的な死生観というものを、もう少し広く社会化していく必要が、運動としてあるのではないかと、思っている。

また、医学界と同様に宗教界。お坊さんに会うごとに、介護とか看取りを考える時には「引導を渡す」という、宗教者として本来の仕事があるのでは、と言っている。しかし、引導を渡すという言葉は、いま死語となっているのではないかと。引導は僧侶が行う一番大事なことなのに、葬儀の流れの中の一部みだけになっていて、死を間近にしている人間に、死のあること、そして、死後のことをしっかり伝えるということはしていない。いや、死を間近にしている人だけではなく、子供を含めたすべての人々に、「あなたもいつ死ぬかはわかりませんよ」というような、他者の死ではなく自分の死のあることを伝えていない。これも問題ではないか。

医学界には天命・寿命に対する畏れの気持ちと、延命治療の善し悪しを見過ごしたままにしておいていいのか。仏教界には「あなたはもうすぐ死にますよ」というような引導を渡すことを考えてもらいたい。

こうしたことを考えながら見ていると、医学界と仏教界には超えがたい壁があるように見える。そこをどう乗り越えていくか。これを解決しなければ、生命の誕生から、介護・看取り・死・葬儀という一連の流れがうまく繋がっていかないと、思っている。

そしてまた、このことを日本人全体が感じていない。考えていない。このことによって大変な無駄が生じている。表現は悪いが、経済的にいえば費用対効果。人間の生と死に対する費用対効果の考え方、どこまで延命治療をすればよいかなど。欧米社会ではこれは基本になっている。だからこそオランダやイギリスなどで安楽死問題が人々の議論になり、宗教者においては死をもっと積極的に受け入れようということになる。キューブラ・ロスの『死ぬ瞬間』という本もベストセラーになる。しかし、これが日本ではうまくいっていない。ではどうするか。これにはメディアにお願いして国民運動のようなものにしなければいけないと、思っている。

先日、NHKで延命治療の番組をやっていて、延命治療に対し本人は拒否しているのに、家族が苦しみ悩んで、結局胃ろうや延命治療をしてしまう。その苦しみや悩み、後悔を番組は丹念に映しだしていた。

どうしたらいいか。ここで私が考えているのは、今の社会状況の中の目標は、あえて

言う。「頑張らない症候群」で、頑張ることに対して拒否というかあまり無理をさせないようなところがある。こういう発言がメディアで繰り返し言われている。それから、「寄り添うイデオロギー」。悩み苦しんでいる人に寄り添え、と。また何でも「傾聴」。悩み苦しむ悲しんでいる人の話を聴け、耳を傾けろ、と。私はこれを「傾聴ポピュリズム(\*)」と言っている。

この症候群とイデオロギーとポピュリズムが社会全体を覆い、これら慰めの言葉が大衆感情となっている。そして、こうした感情が、病に罹った人、苦しんでいる人、死に直面している人が、主体的にそれをどう受け止めたらいいのか、という問題をだんだん希薄にしてきている。これが、先ほど言った安楽死を問題化することや引導を渡すことから逃げ腰にさせているのではないかと思っている。

こうした症候群、イデオロギーとかポピュリズムに対して、伝統的な日本人は何と言ってきたか。人間の帰るべきところは、「自然に返る、土に返る」。これは縄文時代からあったと思っている。ここに仏教やキリスト教が日本に伝わり、浄土や天国という死後の考え方が入り、日本人は大きな影響を受けてきた。しかし、現在の日本人の浄土観や天国観の根底には依然として「自然に返る、土に返る」という意識が流れている。一度ここに立ち戻って考え直してみたらどうか、と思っている。

この自然に返るという考え方と同時に、「国破れて山河あり…」という杜甫の『春望』の冒頭の言葉、日本人はこの言葉が好きで、平安時代から千年の伝統がある。国が敗れようが、自分が亡くなり土に返ろうが自然は残っているという自然観、自然と一体化しようという願望がある。ほとんどの日本人の血肉に化している。これに対応するのが陶淵明『帰去来の辞』の「帰りなんいざ、田園将にあれなんとす…」、田園がいま荒れようとしている、急ぎ返らなければ……と。自然の中に戻ろうとしている。

これに対して、では、この千年の伝統ある価値観・死生観を受け入れられないような壁になっている重要な問題がもう一つある。それは日本の知識人たちが自分の人生観としている考え方。ひとつは戦後大きな影響を与えたオーストリアの精神科医ヴィクトール・フランクルが著した『夜と霧』。彼はユダヤ人で収容所での体験を記している。収容所での極限状況の中で、人間というものは最後まで希望を持てるのだという考え方。もう一つはマルティン・ハイデッカーの『存在と時間』。彼はこの中で「人間の存在は死にさしむけられた存在」だと言っている。「死を受け入れる存在」だとは決して言わない。こうした考え方が戦後の知識人たちによって大衆へと広められた。死を遠ざけ、生そのものに重点がおかれるようになった。

これらからわかることは、先ほど言った、自然に帰るとか杜甫や陶淵明の影響を受けた日本人の伝統的な自然観と、いま大衆化している、生そのものに重点を置く症候群、イデオロギーとかポピュリズムを考えてみると、医学の側も仏教の側も死を正面から受け止めることができなくなっているのではないか、と思う。この問題をどう転換していくか、これには、医学、仏教、メディアが協力するしかないと思う。この中で圧倒的に

政治的・経済的に強い力を持っているのは医学界。だから、こうした問題は医学界から発議してもらわないと動かない。ですからこの会から医学界に提言できるようにしていけたら、と考えているところです。

(＊ポピュリズム 一般大衆の考え方・感情・要求を代弁しているという政治上の主張・運動)

## 各氏の意見・提言

A氏 今回の問題は非常に難しい。看取りといっても、看取る側と看取られる側で違いがあり、ここで何を話したらいいのか考えてしまった。

看取りの問題は、日常的な生活の中で、人間の命には限界があることや宗教心などの話題を、当然のこととして、自分だけではなく、家族や周りの人とたえず意識して話すようにしないといけないと思う。倒れてから「どうするんだ」、「どうしたら楽に死ねるんだ」と言って、その対策を考えても答えは出しにくいだろう。看取りや安楽死などはそういう問題ではないかと思う。

こういう流れからいうと、介護や死の問題のもう一步手前というか、生命倫理の問題があるのではないか。ちょっと話が広がるが、特に生殖医療。非常に進化をしていて、不妊治療までは理解もできるが、まったく赤の他人の腹を借りて行う代理母までいくと、はたしてそれでいいのか、という思いがある。代理母については医学界も議論をしていると思うが、日本の場合はそうはいかない。こうした背景にはアメリカの自己決定権の影響があるように思っている。

これは私も知らなかったことだが、フランスでは、1990年代に生命倫理法ができていて、生殖医療はあくまで夫婦の間の補助的医療に限る、代理母は認めない、と。つまり、生まれてくる子供は、だれかに引き渡されるということを許してはならない、と法律できちっと決めている。しかし、よくあるように、フランスでだめなら外国へ行ってやればいいみたいなことがあるが、そういう場合、フランスでは国籍を認めない。これはいきすぎだ、もう少し優しくという話も出ていて裁判などになっているが、これはやはりフランスがカソリックの国だから、国としてしっかり国会で議論して法律で決める。

しかし、日本の場合は、様々な宗教があってもとまらない。しかし、とまらないと諦めるのではなく、また、単に医学の技術だけで解決するレベルでもなく、やはり人間そのものをどう考えるかという一種の宗教心、これを宗派を超えて議論しなければいけないと思っている。

こういう、生まれるところの出発点を野放図にしておいて、死ぬところをどうしようかといってもそうはいかないんじゃないか。やはり人間のいのちの大切さ、そしてその大切ないのちの限界、しかも生きていくためには努力がなければ生きていけない。だか

ら先ほどY先生が言ったように「頑張らなくていい」という言葉、私はこれが大嫌いで、生物はみんな意識するしないにかかわらず努力して困難に打ち勝って生きているわけで、頑張らなくていいよということは、一見優しいように聞こえるが、それは「生きなくていいよ」に繋がってしまう無責任な言葉だと思う。幸田露伴の『努力論』という本があるが、これはみんなが一回は読んだほうがいいと思っている。生まれるところ、死ぬところを一つの問題として、人間というのは何なのか、ということをもっと真剣に考えるために宗教者には頑張ってもらいたい。

**B氏** 私には昨日まで阿弥陀様のドキュメンタリーを作っていた。薬師寺の新しくできる建物に今の時代に必要な仏様を描いてください、と依頼を受けた日本画家の3年に及ぶ格闘を描いたもので、取材していて、今の人たちにどんな仏様が必要かということは、本当に難しいことだと思った。

それから、ちょっと縁があって、お釈迦様の番組を3年から5年後くらいまでに作ることで着手したが、そこで、日本人って、お釈迦様についてほとんど知らない、ということを感じている。法然さん、親鸞さん、道元さん、日蓮さんなど宗祖のことは知っていても、お釈迦様についてはほとんど知らない。こういう日本人の状況を、我々メディアに関係するものは、もっと取り上げたほうがいいのではないかと考えている。僕自身もお釈迦様の生涯についてはなんとなく分かってはいたが、その知恵・教え・言葉がどんなもので、そしてどうして仏教がここまでになったのか、ということほとんど知らない。勉強しなければと思っている。

で、いただいた「看取り」というテーマについて、これは大変なテーマだとビックリし、いろいろ考えた。そして、私自身の問題として、この見取りを最近イヤというほど体験しているのではないかと。

まず父親を亡くし、母は施設にいて、2歳年下の弟を難病で亡くすなどの経験をした。父親は、入院している間に何度もお見舞いに行っていたが会話もできなかった。弟は前々回のこの会でも話したが、天文学者で、亡くなる直前まで意識がはっきりして話すことはできた。しかし、問題は妻が外国人でカソリックの信者だったこと。延命治療はどうか、葬儀は、戒名は、お寺さんとの関係はどうかなど、どうしたらいいか決めることができない。これは弟に直接訊かなければ、と。訊きました。弟は、「妻の気持ちもあるので、葬儀は無宗教でやってくれ」と。

無宗教で葬儀をするということは、日本人の場合、すごく難しい。自分たちですべてをやらなければならない。お弔いにきてくださる人のこともあるし、どうしたらいいんだろうと困り果てたが、弟の学者仲間10人位が来られて、弟がどんな研究をしていたかなどを弔辞の形で話してくれた。難しい話だったが、弟がどんな仕事をしていたかが初めて分かった、というようなこともあったが、心はなかなかしっくりとはいかなかった。

先ほどY先生やAさんが言っていたように、事前に自分も死ぬというような問題の話

をしなければいけないと思う。しかし、こういうきっかけをだれが与えてくれるか、ということがある。こうした問題に対し、アドバイスやカウンセリングをしてくれる人の存在が必要で、ここにお寺さんの存在が重要ではないかと。お寺さんは亡くなってから関わるところだと一般に思われているが、そうではなく、悩み始めたら相談に行く、そういう仕組みがあれば相当の人が救われるのではないかと思う。今の人は、そういうことを置き去りにして生きていて、私自身も50歳を過ぎて自分の死を考え始めた。もっと早くから考えておけばよかったと反省しているが、こういうきっかけをお坊さんにしていただきたい。葬儀などのお経はなんだかかわからないし、背中を見ているだけ。やはりそういう場でも私たちに向かって、この死をどう受け止めればいいのか、死とはどういうことかなどを私たちの顔を見て、話しかけてほしい。

**C氏** 私は京都や大阪でエンディング(終末)問題のセミナーを企画したり講演をしている。そこに来るのはほとんどが団塊の世代。今よく言われている終活ブームの牽引役はこの団塊の世代。自分たちの死が目前に近づいて七転八倒している状況だと思う。しかし、この終活ブームの内容のほとんどがエンディングノートの書き方。遺言の書き方、葬儀費用、死に装束、葬儀でかけてほしい音楽など、死にまつわる道具立てがほとんど。

ある調査によれば、団塊の世代が葬儀でかけてほしい音楽は、ビートルズの「イエスタデイ」。また、同じ調査で「あの世に一つだけ持っていきたいものは何ですか」という問いに対して、団塊の世代は、パソコン。先祖の位牌ではない。あの世にパソコンを持って行ってエクセルやワードを使って文章を作るわけではないので、パソコンを使ってメールとかネットでこの世と繋がっていたいという未練がましい根性がそのまま出たんじゃないかと私は思っている。

ここには肝心要の死生観がない。だから私は講座などで、「死んだら終わりですか、あの世も何もしないで死ぬときのファッションを考えるだけでいいのですか」と訊いている。この死生観は看取られる側にも看取る側にも重要なことではないか。

今日、臨床宗教師が話題になっている。これは東日本大震災をきっかけに、東北大学の先生が臨床宗教師を提唱した。この時、私はちょうど被災地の取材をしていて、彼は、「人は、生きている間は医療とか福祉などいろんな手助けがあるのに、死という山の尾根を越えてあの世におりていくときになんの道標もない、だからそこに宗教者の役割がある」と言っている。その通りだと思う。

一方、全国青少年教化協議会臨床仏教研究所の2009年の世論調査によると、「信仰する宗教があることは、死に直面した時に心の支えになると思うか」という問いに、「そう思う」が26.3%、「まあそう思う」が44.3%、合わせて70%以上が肯定的で、ここに死生観という意味でも、仏教の役割はしっかりあるといえる。

しかし、実際の死の現場ではどうかというと、そう簡単にはいかない。結論を言うと、看取りという具体的な行為だけを取り上げても何もならないのではないかと。生前にほと

んど付き合いのないお坊さんが、臨終間際に来て「看取りをします」と言っても、「帰れ」と言われるのが関の山。

前回の懇話会でY先生が二十五三昧会の話がされた。これは浄土宗の臨終行儀（\*）とも似ている。私もそれは素晴らしいことだと思う。しかし、それは、中世という時代が、仏教が人々の生きる支えとなっている時代だからこそできたことで、現代ではなかなかそうはいかないのではないか。

私の親しい中村仁一というお医者さん、『大往生したけりや医療にかかわるな』という本を出した人で、彼が毎月「自分の死を考える」という集いを開いているが、ここでも団塊の世代が多くて、彼らに「死んだらお浄土に往きますよ」と言っても「ちゃんちゃらおかしい」と。つまり、お浄土と言ったって、「埃をかぶった文化財的」にしか聞こえない。もっと生身の自分たちの生き方に即してしっかりしゃべってよ、という感じ。それを50年一日のごとく「お浄土」と言い続けてもなかなか伝わらないのではないか。

これは期待をこめた批判だと思っていただきたい。つまり、言葉だけのことではなく、人々の実際の人生、先ほどAさんも言われていた、生まれる前からの命のことを仏教者がしっかりと関与することだと思う。そういうお坊さんであれば、たとえお浄土の話をして、理屈っぽい団塊の世代でも、自分の死についてしっかりと死生観を持ってと言っているんだなと理解できると思う。そういう努力は必要じゃないか。

また、第一生命のライフエンディング研究所の「死のイメージと死生観」というアンケートで、「死後についての宗教的信条」という質問では、「亡くなった先祖は私たちを見守ってくれていると思うか」という質問に対し、78%の人が「そう思う」と答えている。「あの世や来世はあると思うか」では43.5%が「あると思う」。これを見てもわかるように、日本人は普段は「あの世」とか「先祖」とは言わないけれど、アイデンティティとして持っていると思える。

実は、私の90歳になる母が先日心臓発作をおこして緊急入院をした。そのとき延命処置に関しての書類に私が拒否することをサラサラと書き、母に判を押してもらって医師に提出したら、「ずいぶん準備がいいですね」とびっくりしていたが、そういう覚悟は持っていた。で、近日中にその母を老人ホームに入れることになるが、以前読売新聞が有料老人ホームを対象に行ったアンケートに、多くの老人ホームで看取りを行っているがあった。これは、それらのホームの職員と入所者との人間関係がよくできているから最期の看取りができると思う。

また、先ほど言った臨終行儀で、以前、佛教大学で市民を交えた公開講座で実際にやったことがあった。しかし、ここで指摘されたことは、この臨終行儀はあくまで自宅で亡くなることが前提で、病院で死を迎えることが多い今日では、僧侶が死の現場に臨席して看取りを行うのは難しいという結論だった。

都内のある真言宗の59歳のお坊さんが末期のガンになり、死の間際まで法要をし、最期は家族に見守られて亡くなった。ここで大事なのは、延命処置ではなく、痛みの治療、緩和ケアが大きな決め手になるのではないか。このお坊さんには日本在宅ホスピスのお

医者さんが最期までかわり、安らかな看取りにつなげたという。

これがひとつの参考になるのではないかと思う。実際の死の間際の現場では、すでに医師のすることはなく、医療的には痛みを緩和することぐらいだという。そして周囲の家族・親族もなにもできない。手を握ったり体をさすったりすることしかできない。こういう場では亡くなる本人同様、家族・親族のケアも大事になってくる。延命治療を断って親戚から非難される例はたくさんある。こういう時に遺族のケアをすることもお坊さんのひとつの役割だと思う。こういうことも含めて、お坊さんにはしっかりした人間関係を築いてほしい。そして、人々に「死ぬということはこういうことですよ」とか、「死んだ後にはこういうことがありますよ」と話してほしい。それが、先ほどY先生がいった引導の中身ではないかと思う。

(\*臨終行儀 死にいく者と、それを看取り送る者の双方が、極楽浄土への往生を目指して念仏をとえ、阿弥陀仏の迎えを求めるという浄土教の儀式。)

D氏 先ほどY先生の話に出たキューブラ・ロスは、末期ガンなど死が確定した人がどのように死を受容していくかを5段階に分けて著している。最初は否認、そんなことはありえない、自分が死ぬなんてことはありえない。次は怒り、なぜ自分だけが死なねばならないのかという怒り。次が、彼女は取引とっているが、神にこれから自分は善人になるので命を永らえさせてという気持ちが起きる。そして次が、神に願っても死を免れることはできないと分かって抑鬱状態、絶望に陥る。こういう過程を経て、最後に死を受け入れるということになると、彼女は言っている。

これ自体、本当にそうなるのか、日本とは文化の違いなどがあるから難しいとは思いますが、ただ、こういうプロセスを経て死を受け入れていくうえで大切なのが、宗教者との関わりだと思う。この場合、Y先生は、「傾聴」とか「寄り添い」はよろしくないと思っていたが、もちろんイデオロギー的にはよくないと思うが、人によっては死へのプロセスの中で大切なことではないかとも思う。このキューブラ・ロスも、人は、死に至る5段階のどこかで宗教的なものを求める心情が芽生えると言っている。それは、いまCさんが言っていたように、日本人の死生観でもあの世とか死後の世界は生きているわけで、ここに宗教者がどう関わるかということが宗教者の勝負所ではないかと思える。

その場合、たとえば浄土宗なら、浄土ということをはっきりと、オブラートに包んだような説明ではなく、ご自分の信仰そのもの話をしてもらったほうがいいのではないかと思う。もちろん、いろいろな宗教の方がいるから難しいことではあるが、常にそういうことは考えていていただきたい。

ここで大切なことは、お寺さんには檀家さんがいるので、まずここで信頼関係を結んでいただきたい。そういう中で浄土の話をは常にしていれば、檀家さんが死を迎えるときに住職の話を知りたいと声をかけてくるのではないかと思う。

また、介護施設や医療施設などの入所者で仏教の話を知りたいという人も多いので、



そういう施設との連携もすでにあるかもしれないが作っていただきたい。

いずれにしても、私は、死生観というのはひとつの物語だと思っている。人は死を迎えるうえで、自分がどういう物語の中で生き、そして、その物語によって死を受容するのが必要だと思っている。宗教者はこの死に向かう、死を受け入れる物語をもっている大切な役割を担っているのではないかと思う。

E氏 先般、この「ともいき財団」から送っていただいた浄土宗総合研究所発行の総研叢書『僧侶、いかにあるべきか』という本を読んでもみると、ここには僧侶の資質など、宗教界の現状の問題点が網羅されていて、ここに書かれていることを解決できればいいのではないか、と思う反面、なぜこれができないのかと不思議な思いもしている。

それから、島田裕巳さんが書いている欧州のカソリック教会の現状。これを読むとまだ仏教界のほうがいいんじゃないかと思えてきた。1000人が入る教会に数人しかミサに訪れていない。欧州の宗教界は大変なことになっているらしい。こんな状態だったら、ヨーロッパの映画によく出てくる臨終を前にした人の脇で神父さんが『聖書』を読みながら看取るようなことはもうないんじゃないかと思った。

また、先ほどAさんが言っていた、人間の死ぬ時だけの問題ではなく、生まれくる生命の問題、生命倫理の話聞きながら、19世紀に活躍したフランスの画家ポール・ゴーギャンの「われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか」という絵のことを思い出した。この絵はボストン美術館にあり、赤ちゃんを産んだお母さんたち、すくと立つ若者たち、そして死を迎える老人が描かれている。そして、この絵の左上にフランス語で「われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか」と書かれている。まさにこれが宗教に突き付けられている根本的な問題じゃないのか、と。

今回のテーマについて、個人的なことだが、2年前に母の33回忌と父の60回忌の法事をした。先代の住職さんは博識でよかったが、いまの住職さんはちょっと……。私の故郷は北海道の釧路で、まだお寺に対する愛着心は強い地域。それが、です。その法事のお話のときに「お布施と香典の違い」について。これを長々と話した。とんでもないことで、親戚など集まった人はみな呆れていた。まだ、私が幼いころに亡くなった祖母の葬儀の時にその住職は二宮尊徳の話をしてくれた。今でもその話を憶えている。やはり、敬われている人はきちっとした話をしていただきたい。こんな住職に看取りをお願いしたいとは思わない。人を魅了する言葉を身に着けていただかないと台なしになってしまうと思う。

で、この法事のおとき、私は長男なので、長男として出来る限りのことをしようと思った。そして自分が死んだとき、親族に迷惑をかけないようにすることをすごく考えた。この長男という役割を今の人はどれだけ感じているのか。こうした家の中心になる者がいなくなっているから、まとまりがつかない。カオスなんです。これが今の世の中では

ないか。やはり家の中の中心になる者がいなくてはいけない。もちろん長男でなくてもいいが、皆に適切な指示を与え、筋を通す者の存在が必要なのではないか。こういう人間を育てるのもお寺がきちっとして、檀家さんたちの見本になるようでないといけない。それがあってはじめて信頼感が生まれ、看取りだけではなく、いろいろな相談が出来るようになるのではないか。

**F氏** 私 は 1 年 半 前 に 母 親 を 看 取 っ た 。 先 ほ ど の Y 先 生 の お 話 に も あ っ た よ う に 、 母 親 の 意 思 を 反 映 し て ち ゃ ん と で き た の か と い う と 、 決 し て そ う で は な か っ た の で は な い か 、 と い う 後 悔 が 今 で も あ る 。 多 く の 皆 さ ん が 家 で 最 期 を 迎 え たい と い う が 、 母 も 家 で 亡 くな り たい と い う 希 望 が あ っ た 。 し か し そ れ が 出 来 ず 施 設 で 最 期 を 迎 え た 。 こ の 後 悔 が 今 で も 続 い て い る 。

先 ほ ど も 島 田 裕 巳 さ ん の 本 の 話 が で た が 、 私 も 最 近 『 も う 、 親 を 捨 て る し か な い 』 と い う 本 を 読 ん だ 。 親 を 断 捨 離 と い う 。 親 が な か な か 死 な ない 時 代 、 本 音 で 楽 に な る 生 き 方 、 親 捨 て と は 何 か と い う こ と が 書 い て あ る 。 非 常 に ド ラ イ な 考 え 方 だ と 思 っ た 。

近 年 、 介 護 殺 人 が 非 常 に 増 え て い て 、 そ の 数 が 1 年 間 に お よ そ 40 件 、 こ の 17 年 間 で 672 件 起 き て い る 、 と い う 。 そ の 原 因 が 介 護 疲 れ で 、 収 入 も 少 な く 、 体 力 も 落 ち て 介 護 な ど で き ない の で 親 を 道 連 れ に と い う こ と を デ ー タ を 使 っ て 書 い て い る 。 そ し て 、 そ ん な こ と な ら そ う な る 前 に 親 を 捨 て て し ま っ た ほ う が い い の で は な い か 、 と 。 そ う す る た め に は 親 と 同 居 な ど し ない で 、 世 帯 の 分 離 を す る 。 で は 、 捨 て ら れ た 親 は ど う す れ ば い い の か と い う と 、 島 田 さ ん は 、 と っ と と 死 ぬ こ と だ と 書 い て い る 。

極 端 な 表 現 を し て い る が 、 要 す る に 延 命 処 置 と か は し ない で 早 く 死 ぬ こ と を 考 え な さ い と 。 島 田 さ ん は 団 塊 の 世 代 の ち ょ っ と 下 の 年 代 だ が 、 可 な り ド ラ イ な 考 え 方 を し て い る 。 そ し て そ の ほ う が 、 い い の で は な い か と 。 家 族 全 体 で 看 る な ん て こ と は 、 お そ ら く こ れ は 都 会 を 前 提 に し て い る の だ ろ う が 、 や め た 方 が い い の で は な い か と い う 提 案 を し て も い る 。 財 産 を 残 す の は 面 倒 な だ け だ と も 言 っ て い る 。 こ う い う 考 え 方 が 一 般 に ど こ ま で 広 が る か は わ か ら ない が 、 僕 に は や は り 無 理 が あ る 。

一 方 で 、 最 近 話 題 に な っ て い る 本 に 上 野 千 鶴 子 さ ん の 『 お 一 人 様 の 最 期 』 が あ る 。 こ こ で 上 野 さ ん は 、 一 人 で 在 宅 で 死 ぬ に は ど う す れ ば い い か 、 と い う こ と を 書 い て い る 。 今 日 、 そ の た め の 条 件 は 可 な り 整 っ て き て い る の で は な い か 、 と い う こ と を ジャ ー ナ リ ス ト 顔 負 け の 取 材 で 書 い て い る 。 現 在 で は 、 最 期 ま で 看 取 る 老 人 施 設 が 可 な り 増 え て い る 。 そ う い う の を 利 用 し な が ら 、 最 期 ま で 楽 し く 生 き る 方 法 を 見 つ け て い く の が こ れ か ら の や り 方 で は な い か 、 と 。 今 日 、 政 府 も 在 宅 で 最 期 を 迎 え る よ う に 政 策 を 向 け て い て 、 人 々 も そ れ を 望 ん で い る 。 で は 、 そ の た め に は ど う す れ ば い い か 、 と い う こ と を い ろ い ろ 書 い て い る 。

島 田 さ ん と 上 野 さ ん の 本 を 読 ん で 思 う の は 、 家 族 に 頼 ら ない で 生 き て い か な く て は な ら ない 時 代 が 来 て い る の だ な 、 と 。

では、こういう流れの中で宗教はどういうことが可能かということを考えると、それは、従来の葬儀中心の役割だけですむのかな、と。地域の中の檀家さんとの関係だけでいいのか、と。

そのひとつの例として、これには料金が発生するが、9年前から活動している一般社団法人「日本看取り士会」というのがある。看取り士を養成して地域の人々の要請に応えるようなことをしている。厚労省の発表によれば、2030年には施設でも病院でも死ねない人が47万人になるといわれている。そうするとその47万人の人は家にいることになる。この人たちはほとんどが孤独になると思う。そうしたとき、お寺さんは今までのような単なる年中行事で人を集めるだけで完結できるのか、看取り士や介護士になって外に出ていく選択肢もあるのではないか。

また一方で、介護する側の負担をいかに軽減するか、一時的な休息を与えるかという必要性についての考えが出てきている。去年の12月に弊紙で介護をしている男女1000人に「介護をする側に一番必要なものはなにか」というアンケートをしたところ、「身近な人が愚痴を聞いてくれたりする、ちょっとした手助け」が43%、次が「自分の代わりに介護してくれるサービス」が41%。これを見ると、愚痴を聞いてくれるなどの、ちょっとした手助けの方が、介護の手助けより多い。で、この介護で大変と感じたときの相談相手は、家族が53%、ところが相談できる人がいないという人が13%いて、このうち女性の30代40代の人だと30%を超えている。こうした人のために活動している組織もいくつかあるが、この介護から看取りは、今、社会の中で大きな問題となっている。こういうところに宗教者が入っていく、また寺院を利用して組織をつくるなど、これまでの宗教活動を越えた活動があるのではないかと期待している。

**G氏** 看取りということで考えると、中央公論新社から『東京消滅——介護破綻と地方移住』（増田寛也編著）という本が出版されている。それによると、東京圏では2015年から2025年に75歳以上の人が約170万人増えると書かれていた。そして、こうした人の中には、首都圏から地方へ移住し、新しい暮らしをする高齢者が出てくるのではないかと。そうしたとき、その移住先でどのようなことが起きるか、という問題提起がされていた。

私の妻は東北の地方都市出身だが、そこにも介護の施設ができています。そういう施設に入っている人たちはいわゆる上流老人で、医療なども整っている。しかし、設備や医療は整っていても、「うちの施設ではこんな看取りをしています」ということはパンフレットには書かれていない。

先ほどFさんから「看取り士」の話がでていたが、お金をいただいて看取りをするという動きがでてきたということは、介護・看取り・葬儀という一連の流れのなかで、介護や葬儀はすでに事業として確立されているから、死にまつわるすべてが業者さんによって片付けられてしまうことになってきたということではないか。お坊さんの出る幕はだんだんとなくなってくる。「看取りドットコム」みたいなのが出てくるかもしれない。

しかし、これでいいのか。

看取りの問題で、僧侶がどう関わっていけるのかと考えた場合、有料の看取り士の話もあったが、私はやはり、先ほどCさんの話にもでてきた臨床宗教師のほうが可能性があるのではないかと思う。やはり私のなかでは、看取り士より臨床宗教師のほうに寄り添ってほしいと思う。

先ほど言った地方での介護から看取りでも、お金持ちの人は良い施設があるが、そうでない多くの人たちは、どのように自分の最期を過ごしていくのか。私の想像するところでは、ご自宅で行きつくところまでいって、最期は救急車で運ばれて終わっていくのではないかと。

先ほどY先生が仰っていた安楽死の問題、これは誤解されると困るが、私は、安楽死は人間の欲ではないか、とと思っている。人間は、生まれてくる日は自分の意志では選べないが、自分の命日は選べるのではないかと。私がいついつ死にたいと言って、その日に自殺すればその日が命日になる。自分の死を選べる。ここに人間の驕りのようなものがあるのではないかと。Y先生が、自然に帰ることを話されたのは、亡くなる時も自分の意志ではなく自然に亡くなればいい、ということと言われたと受け止めている。

また、Y先生のお話の中で、安楽死を考えるうえで、医学界、宗教界、メディア界のトライアングルがあり、この中で医学界に対する説明が難しいのではないかとご指摘があった。

私は、医学界の方たちは、理知主義の方たちの象徴的な集団ではないかと勝手に思っている。最近、分子生物学の本を読んでいるが、そこには人間を細胞レベルで考え、さらにそのなかの原子レベルでの化学反応を考えていこうとしている。そして、このなかで大きなファクターとなっているのが酸化還元反応で、さらにこれに触媒を使ってエネルギーをどうやって加えたらどういう反応が起きるか、というような難しいもの。そうしたなかで、お医者さんとすれば、医療発展のために、新たな触媒をみつけよう、新たなエネルギーを考えようとする。そして、その可能性は無限にある。ある日突然、不治の病を治せるような薬が発見されるかも知れない。こうしたことを考え合わせると、医学界ではそう簡単に安楽死の流れを受け入れる方向にはならないのではないかと思う。

別に、反理性的なことを善しというわけではないが、今の時代、もう少し人間のいのちには限界があるのだという、いい意味での保守の思想を思い起こして、死の問題に取り組むべきではないかと思っている。これもY先生が仰っていた寿命をどう受け止めるか、ということではないかと。

以上